中国戦線 ・ シベリア抑留

思えば昭和 18 年、村の人に送られ日の丸を振って車中の出征の人となり、浜松中部 97 部隊に入り、4 月練習場はまだ寒かった。1 期教育終わり、10 月牡丹江 343 隊に入る。古参兵が恐ろしかった。気合いを入れる鉄拳、往復ビンタ、油断も隙もない軍隊とは、話に聞いたことも有るが、ひどいところだと思った。中でも十人十色と言いますが、歳上の同郷の准尉さんに優しくして貰い、酒保の主任だったので甘いものが不足気味だったけど、行けば出してくれ助かりました。ついで後輩も入隊してくるが、手を上げるのを見たことはなかった。我は 17 年入隊、2 年歳上の 15 年兵が一番びくびくでした。

昭和 20 年 8 月 7 日、派遣隊は引き揚げ本隊集合された。持つ物を身につけ大事な米は皆、気にしなかったのは大失態、後で解った。積み重ねた米俵に火を付けて燃え上がるのを見ながら避難しなければいけない。上から命令で鏡泊湖を通過中に終戦を知った。後「とんか」の町に赤軍の戦車が、待っていたように捕らわれ、広場で武装解除され、10 月シベリア送りになり、コルホーズで畑作業。山で大木を伐採、2 人引きの鋸で雪の中での作業は慣れるまでは相手が重いのと大きいので命がけだった。昭和 21 年 1 月に倒れ、入院。女の医者で毎日注射して貰い元気に 3 カ月すぎ、日本に帰れるよ、何度も言っていることを信用できず、敵軍の医者とばかり思い通していた事が間違いでした。おのずと悪かったと思いながら、有難うも、さよならも言わず退院したのが心残りでした。

それから昭和 25 年に帰ってきました。昭和 18 年から 7 年、日本から離れ、満州、シベリア抑留でした。母親は寝ていたが、元気でした。

落ちついて見ると、あの川で、あの山で、小学生の遊び友達がいません。皆故人に、墓石の名、戦死の字が眼に飛び込んでくる。あの人も、この人も、俺一人残った。「虜囚の辱めを受けず」と言う戦陣訓を守れず帰って来た。故人の皆に申し訳ない思いを何と言うか、私には解らない。いずれの人か筆をふるい、詞を戴きたく思います。

何はともあれ戦争の勝ちも負けもない。どちらも多く犠牲者が出るだけ。故人になった方々数百万は、靖国でなく、どんな苦しい中で飢え死にが多いといふ話もあるが、確証がない。

福島の原発事故も、後始末になっていない。

こうして見れば美しい言葉で語っているが、故人になった英霊とは耳に聞こえるが、始末もできず、南に北に置き去りと思っているのは、私だけでしょうか。

何れにせよ、地上に九条の宝とともに生きる者、総てを守らなければ、孫子のためと、故人になられた犠牲者へのご恩返しは、これしかない。(N・H)